

動詞の分類とテ形の指導

下の文章にある MM1 などの用語の意味はファイル「反復練習のやり方」を見てください。
※はページの最後に解説があります。

☆は別にファイルがあります。

1. 動詞の分類 1

多くの教科書で、テ形は動詞の分類とセットで教えられるので、まず、動詞の分類を初級の学生にどう教えるかについて書く。

まず学生に発話を促す。「動詞を言ってください。」そして、学生から以下のような動詞を引き出す。「i ます」と「e ます」を分けて書く。足りなければ教師が補充する。

かきます	たべます
ききます	ねます
よみます	おしえます
みます	おぼえます
のみます	いれます
たちます	あけます

教員は、右と左に分けてあることをジェスチャーで示し、それがどうしてだろうか、と考えるそぶりをする。そして、学生に尋ねるしぐさ。これをかわいくやる。

出てこなかったらローマ字で表記する。そうすると、左が **imas**、右が **emas** になることに気づく。

教師発話「そうですね。右は **imas**、右は **emas** ですね。」

対応する動詞の上にそれぞれ「i ます」「e ます」と板書。

教師発話「日本語の動詞は **imas** か **emas** です。2 つだけです。**imas** 動詞は 1 グループです。**emas** 動詞は 2 グループです。一番、**imas** 動詞の勉強です。**emas** 動詞は後で勉強します。」
と言いながら、**emas** 動詞は消す。

ここでいったん動詞の分類の説明を中断し、1 グループのテ形の説明に入る。あとで 2 グループの説明に入る前に、もう一度動詞の分類の説明に戻る。一度に全部教えると学生の混乱を招きやすいので 2 段階に分けるのである。

2. テ形の指導（1 グループ）

2-1 注意する点

- ・ 1 グループ→2 グループ→3 グループの順で指導する。※
- ・ 1 グループは、カ行→ガ行→イ・チ・リ行→ニ・ビ・ミ行→サ行の順で指導する。
- ・ 教えるべきことがたくさんあるので、提出順、教授方法などをよく考え、学生の負担を軽減するよう心がける。
- ・ 明るく、楽しい授業をする。文ではなく、ことばをたくさん扱うテ形のような授業では、

学生を退屈させないために特にこれが大切である。

- ・学生は「買います」と「書きます」のテ形をよく混同する。
- ・五字以上の動詞、例えば「手伝います」「酔っ払います」などでは、学生はどの字を取ってテ形に変えたらいいかわからないことがある。
- ・「読んで」と「呼んで」などのアクセントの違いに着目させる。
- ・「着て」「来て」「切って」「切手」「聞いて」などのアクセントの違いおよび拍数の違いに着目させる。
- ・「言って」と「行って」はアクセントが同じことを示す。

意味の導入は、「～ています」（現在進行）か、「～てください」で行う。どちらで導入するかは教科書によって異なる。後の練習の都合で、導入にはカ行の動詞を用いる。

2-3 意味の導入（「～ています」の場合）

手にボードマーカーを持ち、学生のほうを見て、「私はひらがなを書きます」と発声する。次にボードマーカーのキャップを取ってホワイトボードのほうを向き、ひらがなを書く。書きながら、「私はひらがなを書いています。」2回繰り返す。2回繰り返したら書くのをやめ、再び学生のほうを向いて、マーカーにキャップをかぶせ、「私はひらがなを書きました。」と発声。

2-4 意味の導入（「～てください」の場合）

学生の一人を前に呼び出す。そしてマーカーを渡し、「名前を書いてください。」と発声する。「読んでください」「見てください」「書いてください」などの教室用語を日常的に使っていれば、学生は教員の指示をすぐ理解し、名前をボードに書いてくれるはずである。もし、わからない場合には、「あなたの名前、書いてください」と言って書くジェスチャーをし、ボードを指差す。これで学生は教員の意図を理解するはずである。

2-5 反復練習

「書いてください」で導入するものとして説明を続ける。

導入が終わったら、学生を見回し、理解しているかを確認する。学生から「わからない」というような合図がなく、全員が理解していることを確信できたときは、反復練習に移行する。練習はMM3で行う。

「書いてください」MM3+WCR

2-6 ルールの説明

板書：書きます
か

T 発話：「書きます」、「ます」の前のひらがなは何ですか？

→学生から「き」という答えを引き出す。

T 発話：そうですね。「き」です。

T 発話：それでは、「ます」はさようなら。

上と同時に、板書の「ます」に線を引く：書~~き~~ま^かす

T 発話：そして、「き」は「いて」です。

上と同時に、板書の「き」に×をつけ、その下に「いて」と板書：

書~~き~~ま^かす
か_{いて}

(板書は「き」「ます」の両方に抹消線ではなく、どこが変わるかをわかりやすくするため×と一にしたほうがいい。)

T 発話：「書いて」。読みます。はい、「書いて」。

MM1

T 発話：「書いて」。これはテ形 (te form) です。「書きます」(と言いながら、手の平を前に向け、右手を上げる)、プラス「ください」(と言いながら、手の平を前に向け、左手を上げる。ここで万歳をしているような格好になる。)は「書きますください」じゃありません(「じゃありません」で大げさに首を振り、両手を交差させて×にする)。「書きます」(と言いながら、手の平を前に向け、右手を上げる)、プラス「ください」(と言いながら、手の平を前に向け、左手を上げる。ここで万歳をしているような格好になる。)は「書いてください」(「書いて」のとき、右手を頭の真上に移動する。移動したとき、軽く何かをはたくようにちょっと手前に突き出す。「ください」のとき左手も同様にする。)です。「ください」の前はテ形です。

「書いてください」 MM1

以上述べたように、「ルールの説明」では、その活用形をどのように作るか(作り方)、その活用形の名称、その活用形をどのように使うか(使い方)、を説明する。

2-7 語の変換 1

「テ形導入セット」を準備する。「テ形導入セット」は次の動詞の絵カードをまとめたものである。学習者にとって未習のことばはその場でかんたんに導入を行う。

書きます・聞きます・歩きます・働きます・行きます・泳ぎます・買います・立ちます・すわります・死にます・遊びます・読みます・話します・食べます・起きます・来ます・勉強します

「じゃあ、テ形を教えてください」と発話し、「テ形導入セット」の最初のページ「書きます」を見せる。学生は全体で「書いて」と答える。次に、次のページ「聞きます」を見せる。学生は「聞いて」と答える。同様に「歩きます」。「歩きます」ははじめての 5 音節のことばである。戸惑う学生がいるかもしれないので注意する。「働きます」は 6 音節なのでこちらにも注意を払う。

次に、5 枚目のカード「行きます」を見せる。学生は、「行いて」と答えるはずである。そのような答えがあったら、「ひっかかった」というようにいたずらっぽく笑い、「行って」と発声する。「これは例外です。」「例外」ということばは、学生の母語で繰り返す。確実にわからせるためである。

「行って」MM3+WCR

☆「テ形練習シート」に学習した行の動詞のテ形を書かせる。「テ形練習シート」の一番左に通し番号が振ってあるので、その 1 から 8 まで書くことをはっきりと指示する。「(「テ形練習シート」の通し番号のところを示しながら) 1 から 8 まで書きます (書くジェスチャーをする)。書いてください。」

学習者が練習シートに記入しているときは、必ず机間を巡視し、学生が戸惑っていないか、間違っていないかをチェックする。学生にとって、教壇にいる教員に質問するのは心理的負担になる。近づいてきた教員には比較的かんたんに質問できる。

次にもう一度「テ形導入セット」を見せながら、「書きます」「聞きます」「歩きます」「働きます」「行きます」をテ形に変換させる。以後も、区切りのたびに絵カードを無言で提示し、語変換をさせる。これをフラッシュバックと呼ぶ。フラッシュバックによってテ形の定着を図る。

カ行が終わったらガ行を教える。「導入セット」の「泳ぎます」を無言で提示し、「泳ぎます」を学生から引き出す。出てこない場合は MM3。変換のルールの説明の仕方は「書きます」と同じである。

T 発話：「泳ぎます」、「ます」の前のひらがなは何ですか？

→学生から「ぎ」という答えを引き出す。

T 発話：そうですね。「ぎ」です。

T 発話：それでは、「ます」はさようなら。

発話と同時に、板書の「ます」に線を引く：泳ぎます
およ

T 発話：そして、「ぎ」は「いで」です。

発話と同時に、板書の「ぎ」に×をつけ、その下に「いで」と板書：

泳ぎます
およいで

「練習シート」の 9～11 の動詞のテ形を記入するように指示する。学生が記入している間机間巡視する。

これが終わったら再び絵カードのセットを使って、カ行、ガ行の動詞のテ形を練習させる。この際使うのは上で使った「テ形導入セット」ではなく、「テ形練習セット1」である。

「テ形練習セット1」には次の動詞の絵カードがこの順番で並べられている。

書く・働く・行く・泳ぐ・脱ぐ・急ぐ・買う・手伝う・待つ・持つ・帰る・曲がる
死ぬ・遊ぶ・呼ぶ・読む・休む・貸す・話す・食べる・覚える・忘れる・寝る
いる・着る・起きる・借りる・来る・勉強する・コピーする

このうち、「書きます」から「泳ぎます」を無言で提示し、学生からテ形を引き出す。

次はア行、タ行、ラ行をまとめて教える。これらのテ形はどれも「一って」となり、同じ活用のルールが適用されるからである。「テ形導入セット」に戻る。「テ形導入セット」の「買います」「立ちます」「すわります」のテ形の作り方をカ行などと同様に説明し、「テ形練習シート」の12番から40番までに記入させる。

終わったら「テ形練習セット1」の「書きます」から「曲がります」までを順番に無言で提示し、学生からテ形を引き出す。以後も適宜フラッシュバックを行う。

「死にます」「遊びます」「読みます」も同様にする。これらの動詞のテ形は「一んで」となる。終わったら、「テ形練習セット1」の「書きます」から「休みます」までを無言の提示。テ形を引き出す。

1グループの最後は、サ行である。これも同様に行う。終わったら「テ形練習セット1」の1グループの動詞全部を無言提示。テ形を言わせる。

ここまでで、20人程度のクラスで50分ほどかかるはずである。

セットで扱う動詞は次のような点を考慮して選択する。

- ①1グループはすべての行を網羅する。
- ②基本的な語。
- ③直近の新出語。
- ③例外。
- ④アクセントに注意すべき語。
- ⑤意味的に必要なもの。

3. 動詞の分類の続きと2,3グループのテ形

テ形を導入する前に動詞の分類についての説明を行ったが、このときは、imas と emas に分け、imas は1グループだと説明した。ここで動詞の分類についての説明を続ける。

「テ形導入セット」の「食べます」の絵カードを見せる。

教員発話「『食べます』はimasですか、emasですか？」

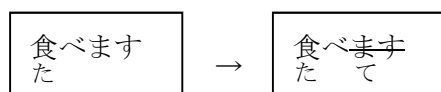
学生全体「emasです。」

教員発話「そうですね。emas です。emas は2グループです。」

「emas」が2グループになるということを提示したので、次は2グループのテ形の作り方を説明する。

教員発話「では、『食べます』のテ形は？（『食べます』と板書）2グループのルールはやさしいです。『食べます』の『ます』、さよなら（板書の『食べます』の『ます』に抹消線を引く）、『て』こんにちは（抹消した『ます』の下に『て』と書く）。だから、『食べます』のテ形は『食べて』です。はい、言いましょう。『食べて』」

「食べて」MM2



テ形練習シートの55から72までに記入するように指示する。机間巡視し、学生の記入内容をチェックして歩く。

7,8割がたが終わったら、手を叩いて学生の注意を教員に集める。

教員発話（ゆっくりはっきり）「じゃ、あとはうちで書きます。書いてください。」

教室を見回し、学生の注意が教員に向かっていることを確認する。

さらに動詞の分類についての説明を続ける。テ形導入セットの「起きます」を無言で提示し、学生から「起きます」を引き出す。

教師発話「そうですね。『起きます』です。『起きます』はimasですか、emasですか？（学生『imasです』と答える。）そうです。imasですね。（教員は『おきます』と板書）でも、『起きます』のテ形は、『おいて』じゃありません。『起きます』はimasです。でも、『起きます』は1グループじゃありません。『起きます』は2グループです。だから、テ形はやさしいです。『起きます』のテ形は、『ます』さよなら（と言いながら『ます』に抹消線を引く）、『て』こんにちは（と言いながら『ます』の下に『て』と板書）。『起きて』です。はい、『起きて』」

「起きて」MM2

教員発話「emasは100%2グループです。でも、imasは100%1グループじゃありません。92%1グループです。8%は2グループです。例えば、『起きます』は2グループです。これを見てください（テ形練習シートを示す）。これの73から78までは全部2グループです。だから、ルールはやさしいです。『ます』さよなら、『て』こんにちは。『起きます』『起きて』と同じだね。じゃ（テ形練習シートを示しながら）、73から78までテ形を書いてみよう。」

学生がテ形を書いている間は再び机間巡視を行う。8割がたが終わったら、☆プリント「日本語能力試験3,4級レベル（現N4,N5）の2グループimas」を配布する。

教員発話「これを見てください。これは2グループのimasです。全部で14ありますね。」

『浴びます』『います』『起きます』『降ります』…あなたたちはこれを覚えます。『浴びます』は1グループじゃありません。2グループです。『います』も1グループじゃありません。2グループです。これを覚えてください。」

ちなみに、日本語能力試験の「出題基準」に、3,4級に必要な動詞として、サ変動詞（「する」がつく動詞）を1と数えた場合、全部で269の動詞がリストアップされている。このうち、五段動詞（1グループ）は172個、下一段動詞（emas動詞）は80個、上一段動詞（2グループのimas）は14個である。

最後に3グループの説明をする。絵カード「来ます」を無言で提示し、学生から「来ます」を引き出す。

教員発話「そうですね。『来ます』です。『来ます』は特別です。『来ます』のテ形は『来て』です。はい、言いましょう。『来て』」

「来て」MM2

板書「来て」
き

次に、「勉強します」の絵カードを無言で提示し、「勉強します」を引き出す。

教員発話「『します』も特別です。『します』のテ形は『して』です。はい、言いましょう。『勉強して』」

「勉強して」MM2

板書「勉強して」
べんきょう

教員発話「『来ます』と『します』は3グループです。3グループは『来ます』と『します』2つだけです。」

テ形練習シートを示し、3グループのテ形を書くよう指示する。

教員発話「じゃ、3グループのテ形を書いてみよう。79から85までテ形を書いてください。」

学生が書いている間は机間巡視をする。2, 3グループの導入にかかる時間は20分くらいだから授業開始からここまで約70分。

4. 復習

7, 8割の学生が記入を終わったら総復習を行う。「テ形練習セット1」を使う。絵カードを無言で素早く見せ、テ形をどんどん言わせる。まずクラス全体に2, 3回行う。次に、学生ひとりひとりに同じことを行う。個人練習も2サイクルぐらい。これが終わったら「テ形練習セット2」を使って、さらに復習を行う。「テ形練習セット2」は、「テ形練習セット1」と同一の絵カードをランダムに並べ変えたものである。

「来る」「着る」「切る」「切手」「聞く」「読む」「呼ぶ」などの絵カードを準備し、

それを上記の順にして右下をホチキスで止める。それらを順番に見せながら「～てください」の形で言わせる。学生の発声を必要に応じて矯正する。MM3

たとえば「来てください」のときには左手を、「着てください」のときには右手を上げなさいという指示を行い、聞き取りをさせる。高低アクセントの違い、音の長短などの判別は多くの学習者にとってたいへんむずかしい。復習には15分くらいかける。

学習者の参考とするため、☆「テ形の作り方」を配布する。

5. テ形体操

テ形を「～てください」で導入した場合は、最後に「テ形体操」を行う。「テ形体操」にかかる時間は10分程度。

教員発話「これでテ形の勉強は終わりです。じゃ、体操をしましょう。体操です（アクションで示す）。」

☆「テ形体操」を配布。下の名詞、動詞の意味を導入し、MM1で練習する。

首・手・足

左・右・前

立ちます・上げます・下げます

息をします／吸います／吐きます

読み終わったら、次の指示をする。教員も学生と一しょに体操する。

1. 立ってください。
2. 左を見てください。
3. 前を見てください。
4. 右を見てください。
5. 前を見てください。
6. 左手を上げてください。
7. 左手を下げてください。
8. 右手を上げてください。
9. 右手を下げてください。
10. 左足を上げてください。
11. 左足を下げてください。
12. 右足を上げてください。
13. 右足を下げてください。
14. 息を吸ってください。
15. 息を吐いてください。
16. 座ってください。

以上でテ形導入練習のサイクルが終わる。所要時間は約1.5時間である。

動詞の分類とテ形の指導

※日本語教師の全員が、1 グループ→2 グループ→3 グループという順番で教えているわけではない。ある日本語学校で先生たちに聞いたら、2→3→1 という人も、2→1→3 という人もいた。指導順の大原則は、「やさしいものから難しいものへ」と「一般的なものから特殊なものへ」である。これら 2 つのうち、「やさしいものから難しいものへ」を重視すると、2→3→1 あるいは 2→1→3 のような教え方が出てくる。一方、「一般的なものから特殊なものへ」を重視すると 1 グループ→2 グループ→3 グループという教え方になる。